古屋山・梶ケ谷山 保護林MAP

旧十和村の山懐深く太古の昔より自然のままに推移してきたアカマツの古屋山とモミの梶ケ谷山 陽樹と陰樹が二極一対の天然林。マツ枯れ被害の防止で人手が入った以外は、大昔より四万十川流域にあった原始の森の姿のまま保護されている。
大木が倒れ森に空間ができると太陽光がさしこみ長い間休眠していた地中の種子が茅(田)をさまし、新しい森へと成長をはじめる。
こうして世代を越え、幾重にも重なる森林は、いつまでも大切に守り、次の世紀につないでいきたい。

鬼北(旧日吉村へ)

大火田
十和でいちばん最初に朝日のあたるところ。
ここから見る朝日と大道の谷の全景はみごと。

Ⓐ登山口

おだやかな尾根

アカマツ

タヌキにばかされたという民話も数々伝わっている

モミ

見上げると木々が枝を張り、緑の広がる豊かな森。
何百年もの間、一歩も動くことなく自分の力で立ち続ける巨木群。
その中で生きるさまざまな生き物。
森の中で生命は途切れることなく巡る。

アカマツの森守るマツレンジャー

何百年ものあいだ立ちつづけている巨樹群に出会える。

昭和の時代まではマツタケがどっさん採れていた。
樽につけたりできるほど全山マツタケの山だったという伝説になりつつある。

足元や頭上の花及なども十分気をつけて!!
全オー!!

昭和の中頃まで人々が暮らしていたところ。

田んぼあと

深い森から水は生まれる

四万十川の支流の一つ

倒木

大道マツは通直な良材として古くから有名で広くとりこまされていた。
近年はマツ枯れが深刻になっており その優れたマツの姿はわずかしか残っていない。
尾根ではネットを張って、地かき、草刈りなどを行い、大道マツ再生事業が行なわれており次代へと受け継がれていく雑樹が生長している。

初夏には南の国よりヤイロチョウが飛来し営巣、子育てをする豊かで深い森が広がっている。

ウロ(樹洞)
小さな穴はだんだん大きくなり、住む住人を変えながら長い年月、動物達のすみかとなる。
何よりもすぐれたエコ住宅である。

ムササビやフクロウなど森の生き物には古くなった木のウロ(樹洞)がかかせない

モマ

ホホン

モミの森守るモミレンジャー

分岐

モミの巣

倒木

作業用歩道(未整備)

二つの保護林とも国有林として管理されている。

大きな倒木

モミ太郎

梶ケ谷山モミ保護林
8.51haa
昭和24年設定

アカマツ再生地

試験地

ゲート

明かるい感じがとてもいい天然林の尾根

古屋受谷

Ⓒ登山口

大道林道 未舗装

大道 古屋口へ

一枚の葉っぱを太陽の光に透かした時その中に宿る1億の命が見える。

人間は宇宙へ行く技術ともっても葉っぱ一枚をつくることはできない。
樹木や植物の力は偉大だなあ。

初夏の頃、モミの新緑のライトグリーンがひときわ鮮やかで愛しく感じる。

十和の山並みがよく見える。

アカマツ再生試験地
十和の山並みがよく見える

古屋山アカマツ保護林
8.88haa
昭和24年設定

ニホンリスマツボックリの食べたあとにエビフライが残る

エビフライ

平家落人伝説が色濃く残る自然ゆたかな里。
林業に携わる人がたいへん多く、四国各地の林業現場の中心となって優れた技術を発揮している。

小鬼北町(日吉)

藤川・大道林道 Ⓐ~Ⓒ登山口

小梶尾山へ

番所谷

下津井へ

Ⓐ

保護林

Ⓒ

大道林道 未舗装

古屋口

Ⓑ

梶ケ谷林道

大道

保護林とは

国有林の中で原生林や希少動植物の保護を目的として、原則、人の手を加えず自然のまま残しておく森林のことです。
その歴史は古く、大正4年(1915年)より発足し、100年の時を刻んでおり、四国には20の保護林があります。

昭和

あめご淵

久保川口

十川中学校

こいのぼり公園

河内

十川

四万十町 十和振興局

四万十川

登山口までは けっこう遠い。

道の駅 とおわ

2014 1月

モミ 樅
葉の先は若木は鋭くトがる。
老木では丸くなる。

ツガ(トガ)
梢…葉の先はわずかにへこんでトがらない。

「モミとがってトガとがらず」

昔、営林署の造林事務所があったところ

Ⓑ

滑板

登山口

梶ケ谷林道

十川へ

谷沿い歩行道、歩道が流れているので注意。

モミ太郎

梶ケ谷山モミ保護林
8.51haa
昭和24年設定

初夏の頃、モミの新緑のライトグリーンがひときわ鮮やかで愛しく感じる。

移りゆく双子の森

二つの保護林は尾根を境にアカマツとモミの森ができている。
アカマツは陽樹で、森林の発達ステージ初期に二次林として生え、林が成立する。
アカマツはやがて森林の遷移にともなって何百年かの後にはモミ、ツガの純林へ姿を変えていくことだろう。
双子のような保護林。この森は、森の移りゆく姿を感じられる貴重な時間がゆっくりとめぐっている。

人の時間が流れる歴史の時間ならば
森の時間は絶えることなく巡る循環の時間だ。

マツオウジ